

第1回

巻菱湖（まきりょうこ）とは

江戸時代後期を代表する書家、漢詩人、文字学者。

安永6年（1777年）に現在の新潟市西蒲区巻地区に生まれる。後に新潟島の上大川前通に移り住み、16歳頃までを過ごす。幼少の頃より書において人並み外れた才能を発揮、逸話を残す。19歳で江戸の亀田鵬齋に入門。平明で端麗な菱湖の書風は、多くの人に好まれ、江戸一の書道塾となり、弟子は1万人を超えたといわれている。天保14年（1843年）江戸で没、享年67歳。

菱湖という号は、出身の巻町に当時あった、菱の実が多く採れた鏡瀧に由来するといわれている。没後、駒師により巻菱湖駒が制作され、現代でも代表的な将棋の駒字として愛好されている他、習字手本も幅広い年齢層に習われている。

第2回

戦前の新潟県における洋画運動
—民間有志が設立運営した新潟県展を中心に—

大正時代の半ば頃から、新潟県内では洋画（油彩）を趣味として描く人が増えていた。その人達が力をあわせて発表の場としてつくったのが新潟県展である。この展覧会は民間有志による運営で昭和5年（1930年）から昭和18年（1943年）まで、13回開催された（1937年は中止）。全国的には行政による運営が多いなか、そのことは誇ってよい。ここでは、この県展を紹介するとともに新潟市について描くことに情熱を燃やした若者の姿を追っていく。

第4回

金子孝信の画業と白貌展

金子孝信（1915～1942）は、昭和15年（1940年）東京美術学校日本画科を首席で卒業、将来を嘱望されたが、昭和17年（1942年）中国戦線でわずか27歳で戦死した。洋風の強い光線を取り入れた画面は観る人を魅了してやまない。没後80年にあたって金子の画業を改めて紹介するとともに、永田鉄雄、村田豊、村山清光、田中芳郎、田中豊男ら新潟出身の美術学校生と地元で2回開催した白貌展（1936年、1937年）も紹介する。

第3回

「若きカフカス人」と旧制新潟高校
—作者中原梯二郎と妻信の愛—

新潟大学の所蔵する中原梯二郎（1888～1921）の作品「若きカフカス人」は日本近代彫刻史にのこる傑作である。北海道で生まれ、東京で活躍した中原の作品がなぜ新潟市にあるのだろうか。それは新潟・六日町生まれの伊藤 信が、実家のあった新潟市で梯次郎と大正7年（1918年）12月に結婚式をあげたことによる。この講座では中原梯二郎と新潟市とのかかわりを改めて紹介すると共に、中原の顕彰に尽力した信の苦労を偲ぶ。

第5回

新潟市を愛した画家 安宅安五郎の画業

新潟市出身の洋画家・安宅安五郎（1883～1960）は、当初日本画家をめざすが、門をたたいた尾竹竹坡（新潟市出身）のすすめで、新潟市民として初めて東京美術学校に進学した。ここで日本画の作画をいったんやめ、洋画を学んだのだった。「砂丘に立つ子供」は大正9年（1920年）の帝展の特選作品で安宅の代表作であり、旧制新潟高校に展示されていたことから新潟市民に広く知られている。この作品の完成までのエピソードを紹介しながら、没後60年の年に安宅の画業を紹介する。

お申し込み方法

① 受講を希望する回の講座名 ② お名前 ③ ご住所 ④ 電話番号を、以下のいずれかの方法でお知らせください。先着順とし定員になり次第、締め切らせていただきます。

■ お電話の方 TEL.025-201-7530

■ webからお申し込みの方

■ ファックスの方 FAX.025-201-7536

www.yui-port.com

9月23日(水)より
受付開始!

主催/お問合せ

新潟市芸術創造村・国際青少年センター（ゆいぽーと）
新潟市中央区二葉町2丁目5932番地7（旧二葉中学校）

TEL.025-201-7530

E-mail : yui-port@kirameki.co.jp

【開館時間】午前9時～午後9時30分

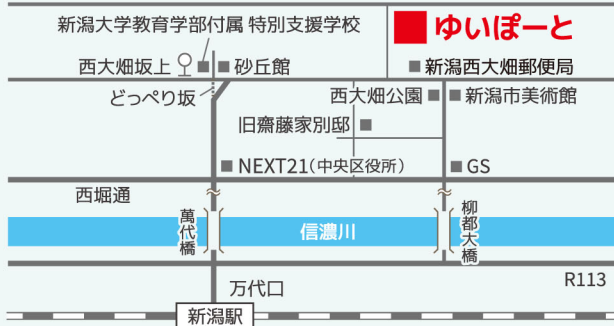
【指定管理者】環境をサポートする株式会社きらめき

*新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱等、体調の優れない方の入場をご遠慮いただく他、マスクの着用および手指の消毒等をお願いいたします。今後の感染拡大の状況によっては、変更になる可能性があります。最新情報はホームページ等でご確認下さい。

https://www.yui-port.com

access

*駐車場の台数に限りがありますので、なるべく公共交通機関をご利用ください。



- 新潟市美術館から約500m
- 新潟駅万代口からタクシーで約20分
浜浦町ラインバス「西大畑坂上」下車・徒歩約10分